CO闘争の中から（第十六回）

ガキも人数で闘った

忘れ得ぬ坑底で吸ったミソ汁の味

畑田末子さん（47才）の場合

とにかくガキも人数のうち

「私は人の中でものをいうような芸当がでげんたちですけん、CO闘争をすすめるなか、せめてガキも人数のうちだと思い、行動にだけは欠かさず参加してきました。四十二年の二月の東京行動のときなど、二回も三井鉱山の本社に乗りこんで、重役を相手に集団交渉をやったのでしたが、そんときも皆さんのうしろに何もいわず座っているほか能なしの私でした。それでもみんなの懸命な抗議を、畳にもひっかけんごたる会社側の態度をみているうちに、むらむらと怒りがあふれ出できて、つい『何とかいうてください』と言やっつけたのでした」

いま、配転されて坑外の仕事をしているCO患者の一人――畑田栄さんの妻の末子さん（47才）はこう語る。

なるほど末子さん自身が自分を語るように、行動派とでもいわれるたちらしく、あの坑底座りこみのときも「早よゆかにゃ損」というわけで、ぐるぐる巻きにした毛布をこわきに、坑底をめざしイの一番にかけこんでいった。

ここで父ちゃんの仇うちと

「そのころ、家には労災病院から帰っている主人もいることでしたし、まだ年少者とはいっても自分たちでたすけ合いながら生きてゆく手だてはもっている子どもたちがいましたし、家のことで心配することはありませんでしたから、この上は死ぬも生きるもみんなといっしょだ。ここで父ちゃんの仇をうたんば……と思いますと、坑底をめざしてさがってゆく足に、思わず力が加わりました」

末子さんはこうもいうが、それでも座りこんだ坑底の七目貫の熱さにはべいこうだったし、頭の上の天井に、いつ落ちてくるかもわからない大きな岩が突き出ているのを見ると、さすがに恐ろしくなって眠る気がしなかった。（あとでその岩を落としてもらってからはじめて安心して眠れるようになったという）

坑底に届いた最上の悦び

その末子さんをはげましたのは地域分会からの心のこもるさし入れだった。タッパウエヤーにいれられてとどけられてくるので、毎日温い味噌汁が吸えた。ゆで卵もたべきれないほどだった。

中でも最上にうれしかったのはCO患者の夫の栄さんからの贈りものだった。末子さんがなみはずれて大がらな体であることを思ってのことに相違ない。思いがけなくも、ビニールの袋に氷といっしょにいれられた、冷いバスタオルが届いたのだった。しかも「すまん、がんばってくれ」との便りと共に。夫の仇をうつためにばかり大決心をもって坑底に座っているときもとき、あふれんばかりの夫の愛情を肌身に感じることのできた末子さんのうれしさは、何にたとえようもなかったのではなかろうか。

末子さんの決意は、こうした闘う仲間や夫のはげましによっていっそう固まった。警察の動きが活発化してきたぞ、ひょっとするとひっぱりあげにやってくるのでは……との情報が伝わってきたときはお互いにはげまし合いながら、みんながもっていたタオルを出し合って腰から腰をつなぎ合わせ「さあ、くるならきて見ろ」とかまえたものだ。

その後うちつづいたすべての闘いに、末子さんの姿は必ず見られた。

三川鉱東門におけるあのハンストにも加わり、最後までがんばったのはよかったものの、そのためそれまで一年ばかり仂きつづけてきたうどんやの〝白滝〟を首になってしまった。「あんまり休んでもらうので、店としてこまる」というのだった。

これからもがんばる決意

配転料を食いつぶしてきたがもうこれもダメ。使い果たしてしまった。「何とか新しい仂き口をさがしてがんばらんならでけんが」と思いよるところですたい」と末子さんはこれからも闘う決意を固めているものの、一方「ばってんこのころはもう、CO・遺族のいま、栄さんの賃金はひと月二十五日満勤してさえ手取りでやっと二万四千円ばかり。だがストライキや特休のため、たいてい二十二万から二十三万にしかならないので、実際に手にする賃金はほとんど二万二千円と二万二千円ていど。半月で九千六百円しかもらえなかった月さえある。

闘争でストライキをうってもらうときなど、妙に皆さんに気の毒か思いをするようになってしまいましたが、いったいどげんしたっでしょうか」という組織内のふんいきが、いま大きな問題として横たわっていることを見ないわけにはゆかない。

昔の面影ばいずこに

「父ちゃんは性来、手が器用なたちでした。川柳もさかんにつくりましたばってん、手芸の方はさらに上手でした。時計に油をさす、あの二～三本毛のついた小さな筆で、これも自分が竹でこさえた小指ほどのカッポリとか、ゲタなどに、鶴亀や松竹梅や、ヌードなどの絵を描いて楽しんでいたものです。裁縫のお針の先を動かして、一センチ角ほどの折鶴を立派に折って見せる父ちゃんには、さすがに私もおどろきました。

それがガスを吸わされたばっかりに手芸など思いも寄らず、再びつくりはじめている川柳も果して川柳といえるものかどうか。

ちょっとしたことは忘れてしまい、どうしたわけか口の中が始終ただれているもんですから、以前あれほど好きだったワサビやカラシがぜんぜんたべられんとです。少しからいとライスカレーさえダメで、もうホーホーいってたべる始末なんです。

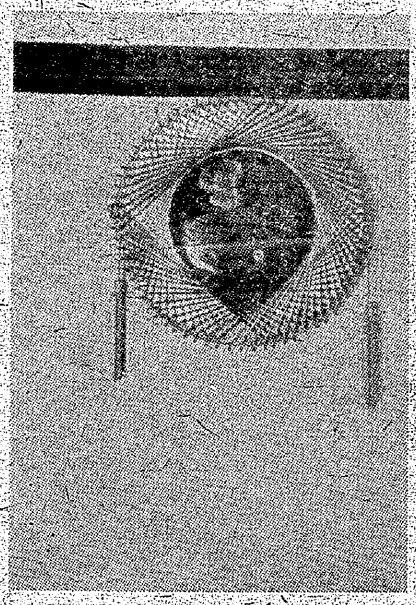
それに自分がいい出した以上は、後でたとえ間違っていることがどんなにハッキリしてきても、絶対に押し通さずにはおきませんし、このころでは子どもたちともよく話し合って、つとめてさからわないことにしております」

昔の面影やいずこ。末子さんの言葉を聞けばやっぱり、二度とふたたびCO中毒患者をつくり出すような悲惨をくり返すようなことがあってはならないことを、しみじみ思うのである。それこそ、私たちの団結と決意にかかっていることだが。

栄さんの句は何を語る？

終りに、妻への愛情が切々とうたいこまれている畑田栄さんの川柳数句を、近作の中から選んで紹介しておこう。

雨空を眺め面会の妻を待ち
消灯へ明日の外泊が待ち長し
月末にやっと質屋の利を払い
内転の妻にすまない酒を飲み
外泊の夫待つ妻薄化粧
病床の妻が予知した雨が降る
庭の草妻内転で荒れはじめ
給料日飲み屋の前を避けてゆき



写真上は畑田さんの壯健なころ夫婦仲よく。左は畑田さんが入院中の作品。

三池の闘いの正しさは やがて歴史が示す

ドイツから

日本労仂者階級の先頭に立ち、常に革命的労仂組合として闘う三池労組の誇りある闘いに対して、ここ社会主義ドイツ民主共和国より感謝の意と激励の言葉をおくります。

CO闘争・第四次合理化反対闘争・炭鉱国有化闘争と数多くの闘いの中でも、とくに五年にもおよぶCO闘争に関しては、われわれ一同その非人道的な日本の独占資本に対して激しい憤りを感ぜずにはいられません。

一九六七年、国会において「酸化炭素特別法が制定されたときには、それが不備であるにもかかわらず、われわれはCO闘争の大きな成果として、期待の目をもって見ました。

ところが法制定後二年を経過した今日、法律の具体的適用をすめるどころか、CO患者の生活保障、生命の保障さえ守られていないと聞きます。政府・独占資本の意図があくまで、法の骨ぬきにあること、同時にCO患者をまっ殺することにあることは明らかです。合理化のためなら労仂者の生命など何とも思わぬ日本の独占資本家たちを、われわれは絶対に許すことができません。

社会主義国になると、日本の資本家たちがいかに労仂者階級を劣悪な社会保障のもとで、搾取を行っているかがよく理解することができます。

われわれは、労仂者階級が安心して仂き、保障された生活ができる社会体制を、一日も早く作りあげねばなりません。そのような社会体制を目指す階級闘争の中で、われわれも不十分ながら、三池とともに闘った日本の労仂者階級の一人としての誇りを思うと同時に、三池の伝統を傷つけてはいけないという責任を痛切に感じます。三池の闘いの正しさは、やがてくる日に書かれる歴史が示してくれることでしょう。

われわれ一同心から、三池の栄えある闘い・CO闘争に成果あらんことをお祈りするとともに、われわれも日本労仂者階級の一人ひとりとして、三池とともに闘わんことを誓いたく思います。

一九六九年三月一九日、
ドイツ民主共和国
総評留学生団

なお総評留学生団には、三池労組から留学している内田和夫さん（港務）と山田勝巳さん（宮浦）の二人がふくまれている。

〝ぼうず〟

宮浦　高椋竜生

高校三年の
ぼうずが
夕飯を炊いていてくれる日
ざしきを掃き出していてくれる日
くず籠を空っぽにしていてくれる日
（自分でシャツを洗っている日）
〝みいけの闘いは
正しか
とうちゃん
かあちゃん
がんばれ〟
とうしろから
発破かけられているようだ

宇山カーボンから組合旗の贈りもの

このほど、さきにじん肺補償闘争に輝く勝利をおさめた化学同盟宇山カーボン労組から、「団結」「総評」「炭労」「三池炭鉱労仂組合」と染めぬかれた、目もくらむばかりに真赤な組合旗が寄贈されてきた。

同労組から寄せられた言葉がはいっている――

「擬装閉鎖・全員解雇反対闘争、じん肺患者補償闘争に、ご支援によって成果をおさめ、一月三十一日をもって闘争を終結しました。感謝の意をこめて、組合旗をおくらせていただきます」

ありがたいというほかない寄贈された組合旗をなでながらCO患者家族の会の松尾会長は、「私たちも、一日も早くこんな記念の旗をお礼に贈れる身になりたいですねえ」としみじみ語った。

×

宇山カーボン労組の住所は「大阪市浪速区新川町三丁目五九六化学同盟関西地区本部内」で、本紙八六四号でお伝えした住所は誤りでしたので、訂正致します。【編集部】